

板垣退助のパリ

——日本の自由民権とフランスの第三共和国の 比較政治文化史的考察——

ヨース ジョエル
(高知県立大学文化学部教授)

自由民権運動と世界

自由民権運動は、「明治」という成功物語の陰に隠れがちであるが、明治期日本の政治社会に大きな跡を残した。この小論では、日本国内の政党政治史という枠組みを超えて、自由民権運動が19世紀から20世紀にかけての世界の動向と密接につながっているという理解を前提に、その指導者である板垣退助の渡欧について考察していきたい。

自由民権運動の活動家たちはみずからの活動が世界のそれと通じていることを強く意識していた。渡欧する機会に恵まれることがなく翻訳書だけを頼りに思想を形成してきた植木枝盛の『民権自由論』（1879年3月発行）を例にとっても分かるように、革命を起こして自由を勝ち取った米国（独立戦争）やフランス（革命）は圧政に屈しない市民の模範とされた。¹⁾万国共議政府と宇内無上憲法の理想を謳う『板垣政法論』（1881年3月発行）で板垣の代筆をつとめるなど板垣退助の知恵袋といわれる植木枝盛は、ほかの著作においてもこのような意識がはっきりと認められる。活動家たちは列強の植民地支配などから目を背けたわけではないが、パリやボストンで実った自由革命が欧米にとどまらない意味を持つと認識した。

一方、日本[・]の場合はどうだろうか。明治維新に端緒する日本の近代化は紛れもなく世界史的出来事であるが、19世紀の自由民権運動の意義については、運動の発生から21世紀の今に至って、その意義の大小だけでなく、その有無に関する議論すら絶えない模様である。

自由民権運動への評価は、明治のそれと対になることが多いが、そのベクト

ルが同じ方向を向くとは限らない。つまり、明治政府の指導者たちが国際情勢を正しく理解し、彼らの適切な指揮の下で迅速な近代化が遂げられたというナラティブでは、自由民権運動の功績をさほど評価する必要がない。民権家たちは、現実離れをした理想主義者か、自由などの理想を隠れ蓑に権力の掌握を目論む策略家か、どちらかということになる。その評価は、世界史における位置づけと重なる。つまり、自由民権家たちの理想は欧州および世界の現実を抜きにした理念に過ぎず、西洋の実態を知らない連中の美辞麗句にとどまっている、と。それでも、自由民権派の活動家たちが世界各国で同じように掲げられた理想を追い求めたこと、また、運動の指導者たちが海外の事例をばねに政治権力に異論を唱えつづけたことは事実である。その意味は大きく、「Meiji」の世界史的意義を語るうえで度外視すべきストーリーではない。

決して単純なストーリーではない。自由民権運動それじたいを一つの物語として捉えるならば、全体の流れが入り組んでいるし、始まり（1874年1月、民選議院設立建白書の提出と新聞掲載）こそはっきりしているが、その終焉については簡単に特定できない。1884年の激化事件と自由党の解党、1887年の大同団結運動の挫折、1889年の欽定憲法発布、1891年の帝国議会の発足、どれをとってもストーリーのエンディングとしては魅力あるものと言えない。そして、全体を捉えにくくするもう一つの原因が、運動を統率する人物の、それぞれの場面での行動である。

ここでは、自由民権運動が日本だけでなく19世紀の世界を背景に展開される運動であるという理解を踏まえて、フランスのパリという華やかな舞台で繰り広げられた、日本の自由民権運動を彩る一幕に焦点を合わせたい。

洋行という問題

「Meiji」と比べて、「the movement for freedom and people's rights」への評価は低い。その不評の原因の一つがリーダー格の板垣退助の一貫性に欠けるように見える動向である。一貫性がないどころか、ときには矛盾していると見られても仕方がない動向である。たとえば、1873年10月に下野して1874年1月の建白書で薩長藩閥の「有司専制」を難ずるかと思うと、1875年3月に再び参議と

なる。同年10月にまた免官となり政府批判に明け暮れる。征韓論以降政府を離れ鹿児島に戻り、4年後に武力対決のすえ自決する西郷隆盛の一貫した姿勢との対照が大きい。理想を翳してはかなぐり捨てる「機会主義者」呼ばわりして、権力欲だけのために動くという酷評を受けてしまうのは、酷評する側の意図はともかくも、まったく理解に苦しむ発想ではない。このような評価をつよく印象づける例として、いわゆる洋行問題が挙げられる。

板垣の「洋行」は、なぜ「問題」となったか。憲法や国会は欧州のいわゆる文明国で共通して行われている制度である。国会開設と憲法制定を訴えて活動をしてきた自由党の総裁である板垣が欧州へ渡航するという相談は、ごく当然である。それでも、板垣の欧州訪問は、計画の段階から自由党内の大きな騒動を呼び起こし、世論を疑心暗鬼に陥れる結果となった。この騒動にまつわる様々な動きについては、すでに数多くの角度からなされた研究があるので、ここで詳しい経緯の紹介と分析を省く。当時の大きな流れだけをあげるなら、集会条例の厳格化など政府による政党弾圧が厳しさを増し、また、自由党の財政が危機的な状況に陥りつつある時期に、後藤象二郎が板垣退助自由党総裁に洋行の案をもちだす。時機といい、渡航に必要な資金の工面といい、対立する立憲改進黨はもちろん、自由党内からも辛辣な批判の声が上がる。²⁾ 実は政府による籠絡工作であるという疑惑も最初からある。それでも、板垣と後藤は、栗原と今村という通訳を従えて、渡欧した。外遊を断行したもの、板垣の出発前から分裂し、ほかの要因も相俟って帰国の翌年に解党に追い込まれる自由党にとっては悲惨な結果につながる行動であった。自由民権運動の弱体化をはかった政府の画策であったとするなら、そして、そう見てよさそうであるが、みごとに成功したと言わざるを得ない。³⁾

ただし、疑問は残る。政府が資金の調達に関わっていたなら、その事実を知らないと主張する板垣は、ナイーブな理想主義者であるか、詭弁を吐くオポチュニストであるか、そのどちらかになる。両方とも政治家にとって致命的なレッテルである。機会主義者といわれる板垣は、政府の意図を見抜くことなく、問題の鎮静化に失敗して、分裂と解党という敗北を予見せず、舵を切らないままに洋行に踏み切ったのはなぜだろうか。

ここでは、政治的判断の巧拙や政党の動向に関する分析という国内政治の枠組みを離れてみたい。巧拙の判断基準を自由党の洋行前後の興亡ではなく、世界とのつながりを求める行動がどのような実を結んだかにおきたい。それは、板垣が欧州で得た収穫の検討であると同時に、枠組みそのものの入れ替えを前提とした試みである。洋行問題の「問題」よりも、「洋行」という要素に焦点を絞り、世界史的観点から照明を当ててみたい。とくに、板垣が1882年12月22日から1883年5月13日まで、半年近く過ごしたフランスの政治状況、アジア政策、文化的背景などを浮かび上がらせることで、洋行を資金源や党内訃という観点のみから捉えないで、アジアの新興国であ（ろうとす）る日本の民主勢力の代表であ（ろうとす）る板垣のパリ滞在がなにを意味したかについて考察していきたい。

情報源

板垣のパリ滞在は、概して、板垣の判断力のなさを裏付ける事例として語られることが多い。渡欧する前から、対立する改進黨、そして党内の反対派の批判が目立つ。そして、滞在中と滞在后にもたらされる報告は、その冷淡な眼差しを受け継ぐ。板垣はパリで部屋にこもり、同伴者の後藤とも口を利かない。重い腰を上げイギリスにわたって憧れである思想家のスペンサーにやっと面会できたが、空虚な理想論を吐くと、呆れて「no, no, no」と口走るスペンサーに中座され置いてきぼりを食らう、という具合である。⁴⁾ 20世紀の、板垣に批判的な出版物でなくても、このような描写が少なくない—— M. Jansen のように、権威ある学者の書でもスペンサーとのエピソードは紹介される。⁵⁾

ただし、よく考えてみると、この描写の情報源は伊藤博文、森有礼、西園寺公望、当時欧州に駐在する明治政府の要人たちによる報告や書簡がほとんどである。村瀬が指摘するように、板垣の出発前から、欧州にいる伊藤が「政府と自由党との交渉を操縦していた」のであり、滞欧中の動向も、板垣籠絡作戦や政府側の（情報）操作が目立つ。森有礼は伊藤に「乍去板氏今に至り説を表変（ママ）すること為し能はざるへければ僕の道唯た之を着実に化し […] 民と権との何物たるを理解せしめ」と書き送り、西園寺もまた伊藤に「今村のよく

通弁をいたし不遣に付大不平、後藤に向ても彼是恨がましき様子也。要之終日矮屋に陋居し嘗談食茄子言語も分からず交際も無之 […] 蓋彼の論は回り遠き事のみ申居数々捧腹仕候」とかなり辛辣な報告と評価をしたためている。伊藤自身は、ベルギーのブリュッセル、そしてロンドンで再度板垣と面談するが、井上馨に「丸で話にならぬ自由家にて仏蘭西の如きは未だ不自由国にて不足取と謂が如き有様にて、誰も相手になる者は無之候」と知らせる。これらの文面から、手に負えない板垣への蔑みに近い感情がにじみ出ている。⁶⁾

バイアスから自由な情報源であるとは到底言えない。党内外の反対を押し切って渡欧した板垣は、彼らにとって、都合の良いカモと化した、という考え方もできる。本場で言葉も思想も全く通用しない無能な男として描くという誘惑は大きかったはずである。歴史は勝者の歴史である。理想だけを唱えながらも相手にされず、理想と（欧州の）現実との格差を受け入れられず、ずっと部屋に籠っているという板垣像は、実際に定着してしまっている。逆に、後藤象二郎はというと、資金調達を企てたフィクサーらしく、ベルリンで伊藤を訪れるなど、暗躍ともとれるような活躍が報告されている。融通が利く。伊藤らにとって、最も都合の良い男は、「誰も相手になる者は之無候」板垣ではなく、後藤だったかもしれない。

「矮屋に陋居する」板垣。戯画ともいえるこの描写には伏線があると思えてならない。つまり、パリ滞在が完全な空振りになってしまった板垣洋行という名の「茶番劇」は、同じ時期に欧州をせわしく動き回り憲法起草のための研究を手堅く推し進める伊藤博文の滞欧という「エポス」と、実に鮮やかな対照をなす。あまりにも好都合な構図である。秘密裏に渡欧しようとしたが、出発前に民権派新聞に計画を暴露された伊藤の派遣もけっして穏やかなものではなかった。ベルリンでグナイストの教えを乞う伊藤一行の滞欧中の一場面である。

「どうやらグナイストは、日本が憲法を作るなどまだ100年早い、〈銅器に鍍金〉をするようなのだとみなしていたらしい。グナイストの冷笑交じりの言葉を聞いて、一行は啞然とし、そして憤慨した。伊藤は見事に鼻をくじかれ、調査は早くも前途の多難さを予測させるものとなってしまった」

このような展開は、板垣がロンドンでくらったスペンサーの軽侮（報告によれば、である）とさほど変わらないといえないだろうか。⁷⁾ 明治期の渡欧もその評価も一筋縄ではいかないようである。

ここで、新しい展望を拓くのにどうすればよいかという問題に突き当たる。板垣らの現地での動向を違う角度から見ると、どの資料を使い、それをどのように読み解くのが効果的か、というのが一つ目の問題である。もう一つは、従来のパリ滞在に関する研究にやや不足しがちな視点、つまり、板垣の動静を、パリを主な舞台とするフランスの国内政治およびフランスを取り巻く国際情勢とどのように結び付けるか、という疑問である。しかも、二つ目の疑問への答えをさぐることで、(一つ目の) 資料解読だけで埋めることが出来ない穴を補う道も開かれる。脚本が残っていない一幕での主役の立ち振る舞いを再現するのに、ほかの役者の台詞だけで足りないのであれば、その舞台となったフランスについて知ることで、推測の幅を広げ芝居のあらすじへの理解を深めることが出来よう。

一つ目の問題に関しては、新たな資料が発見されない限り、画期的な進展は見込めない。はたして可能性はあるのか。残念ながら、板垣自身は、自ら筆を執ることが少なく、⁸⁾ 洋行についてまとめた報告を遺すことはなかった。後藤象二郎は、さらに影が薄く、伊藤らの書簡や記録のほかに目立ったものはない。

では、フランスに同行した通訳の今村和郎と栗原亮一はどうか。栗原は自らが主筆を務める『自由新聞』に「板垣君欧米漫遊日記」⁹⁾を連載し、続けて同紙に「泰西紀遊 仏国の部」をも載せたが、我々の好奇心を満たすのに十分なものではない。「日記」は横浜からマルセイユまでの旅路を丁寧な、栗原自身の随想と漢詩を織り交ぜながら色鮮やかな筆致で描写する。ただし、紀行文として一定の読み応えがあっても、パリに到着した時点で打ち切られる。後日の文章は、真辺氏が説明するように、1884年5月から22回の連載で、滞在那のものよりもフランスの要人らの経歴を紹介することで終わってしまう。しかも、8月に中国福州で戦われる清仏戦争の取材のために大陸に渡ってから、洋行について触れることはなかった。1911年に死去したと考え合わせれば、実

に長い沈黙であるが、その理由については推測するしかない。¹⁰⁾

厳密に言えば、「日記」にパリ滞在に関する記述が全くないというわけではない。27日～31日の、パリのホテルで過ごした数日に関する描写は、わずかながら、興味深い情報を含んでいる。27日は「メヤベヤヤ客舎」に到着する。ホテルは、シャンゼリゼ近くの Rue de Rohan (ド・ローアン通り) に面していると栗原は記す。¹¹⁾ ホテルの正体は確認しにくいが、まさにパリの中心街にあり、左岸に多い安宿 (いわゆる *garni*) ではなかったと推測される。

28日は終日ホテルで過ごすが、夜に井田讓駐仏公使が訪れ、話は夜中まで続いたとある。話は安南 (ベトナム) をめぐる清仏対立にも及んだらしく、栗原は「仏国ハ疾ク已ニ自ラ之ヲ属国ト認メタレバ必ズヤ支那ノ附庸タルヲ認許セザルベシ仏国ニシテ果シテ之ヲ認許セザレバ客年我邦ノ朝鮮ニ於ケル其処置ノ当否余之ヲ江湖ノ論客ニ質サント欲ス」という、清・越・仏の関係と清・朝・日のそれを比べながら鋭い問いで締めくくる。ちなみに、井田讓は、福州や上海での勤務経験のある外交官である傍ら、軍人としてもキャリアを積んだ人物である。数週間前にサイゴンを見てきた一行との話が盛り上がり、安南の情勢に触れたのはごく自然な流れと言える。上述したように、栗原は数ヶ月後清仏戦争に特派員として派遣されるようになるが、この時点で知る由もなかった。

自由党の結党にも立ち会った、やり手の民権派ジャーナリストである栗原の日記からは、その国際情勢に関する知識、意識の高さ、そして学習の機会を逃さない志しがうかがえる。¹²⁾ 29日は「仏国地図を点検す」とあり、翌日も「仏史ヲ緋キ革命ノ篇ヲ閱ス余今其国ニ在テ其史ヲ読ム感慨更ニ深キヲ覚フ」と、史書を読んでフランス革命に思いを馳せるという記述がある。31日は、パリ到着の興奮が冷めたせいかわ、記述は「客舎無聊復塵世ノ忙ヲ知ラズ」と、素っ気ない。フランス人たちは食卓を囲んで大晦日を家族と賑やかに過ごしているが、日本から到着して間もない一行は、雨の降る一日を「無聊」(退屈)を凌いで過ごすしかなかった——このような状況を想像してしまう言葉である。

そのつぎの記述は、年が明けて6週間も経つ2月16日付のわずか数行にとどまっている。空白の理由は明記されていない。続く3月30日の「巴黎發ノ

報」は、ガンベッタの死去や様々な勢力による不穏の動きを紹介するが、クレマンソーなどとの活発な交流については後でまた報告する（「帰国ノ上完備ノ者ニ綴リ之ヲ詳記仕度候……」）という一言で終わってしまう。このように、栗原の記述をくわしく吟味すると、一年で最も暗い季節を異国で過ごす一行の複雑な心境を含めて色々とは推測することができるが、活動の記録として十分とは言えない。

もう一人の通訳はどうか。今村和郎（1846-1891）は、国際経験豊富で法律に詳しいエリート官僚であった。板垣・後藤と同じ高知県出身でありかつてフランスに留学していた中江兆民とも交流があった。¹³⁾ ただし、板垣よりも、1873年の岩倉使節団の欧州訪問に従っていった時から同郷の佐々木高行らと通じており、通訳というよりも目付け役であった。出発前からこの人選を訝る声があった——立憲改進黨系の『東京横浜毎日』は1882年9月10日にこう報じた。

「氏は板垣退助、後藤象二郎の両君と俱に欧州を巡遊せらるると見えたり、この事若し果して真ならんか余輩少しく疑いなき能わず [中略] 況んや欧州巡遊の如きその費え巨万なるべければ、如何なる人たりとも容易にこれを支弁し難からん、或は請う伊藤参議欧州に滞在せらるる故に氏は彼地に赴かるるには非ざるかと、如何のものにぞ」

後々公開される公文書は、ここで疑われる裏事情（お金の出どころ）を裏付けている。結局、今村は板垣らとともに帰国せず、伊藤博文のもとでドイツでの憲法調査に加わる。板垣のパリ滞在について積極的に語ることはなかった。むしろ、かたよった通訳で板垣の現地での交流をサボタージュしたりフィルターのかかった情報を流したりしたと疑われてもおかしくないが、確証はない。¹⁴⁾

これらを踏まえて、一つ目の問題について断言してよかろう。つまり、板垣のパリ滞在に関する、当事者たちによる記録はきわめて不完全である。不完全であるから、当事者たち以外のもの、特に、すぐ側で滞在中の挙動を見た人々の報告に頼るしかない。しかし、そうすれば、板垣の一挙手一投足に目を凝ら

して監視した通訳や外交官たちの「篩」にかけられた情報に頼ることになる。それが伴うリスクについては、定着してしまっている板垣像をみれば確認できる。

新しい角度

この窮地を脱するのには、二つの方法しかない。一つは、既存の資料の再検討と再構成である。つまり、今まであまり注目されてこなかった、板垣らが帰国後に残したなんらかの記録を発掘すること。もう一つは、同じ場面を広角レンズでとらえるという手法である。

前者は、真辺による「民権派とヨーロッパの邂逅」（2015年）で示される見解が大いに役に立つ。当研究は、『自由新聞』雑報欄での栗原の体験談や板垣が演説で触れる訪欧体験の断片を繋ぎあわせることで、板垣のパリ滞在（およびブリュッセルとロンドン訪問）に照明を当て、立体的な板垣像をあらたに浮かび上がらせるのに成功したと言える。¹⁵⁾ その像とは、狭い部屋にこもる堅物ではなく、物おじしない壮年（板垣は満46歳であった）の活動家のそれである。それらの断片は板垣・栗原自らの記憶を頼りにしている限り、美化された部分もあろうが、断片であるからこそ、意図的な美化の産物ではないと考えてよかろう。情報源としての価値は、森や伊藤の書簡と少なくとも同等である。そして、そこから浮かび上がるのは、通説と異なる滞在像である。

板垣はフランス共和主義の旗手であるレオン・ガンベッタとの面会を望んでいたが、パリに到着早々、ガンベッタ氏の訃報に触れ、1月6日にその葬式を見に行った。当時のフランスのリベラル派のなかで頭角を現しつつあったクレマンソーとも、親しく交流した。板垣とヴィクトル・ユゴーとの談話については、ほかの研究でも触れられることが多いが、真辺は、それを文豪ユゴーがその権威に圧倒される鈍間を論したとほのめかすような構図ではなく、気取らないユゴーと真剣な板垣との人間味あふれる交流として活写する。さらに、エミール・アコラスとの会談の描き方も説得力がある。欧州は政治において思ったほど進歩していないという板垣の観察に対して、「板垣の観察が実によくヨーロッパでの現状を看破していると〔アコラスが〕称賛した」、という。¹⁶⁾

伊藤の嘲笑いととの差は大きい。真辺は、板垣のパリでの活動と様々な洞察とその後の政治活動とを積極的に結びつけることで、洋行だけでなく帰国後の姿勢にも付きまとう「不器用」説に対して一石を投げる。

もちろん、ここで忘れてはならないのは、フランス語を話せない板垣は通訳を通してしか会話が出来なかったこと、よって、栗原ならまだしも、今村といういくらか厄介な「媒体」がそれぞれの出会いと話し合いにどのように影響したかが明らかでないことである。栗原の日記は、板垣が2月に大統領のグレヴィーの夜会に参加したと記す。黙々と料理を口に運んだのだろうか。どのような出会いがあったか知るすべもないが、言葉が通じなくても、フランスの大市民たちを観察する良い機会となったに違いない。

イギリスでの出会いと言えば、スペンサーとの面会が有名である。スペンサーが板垣の空論に呆れて中座し「其俣にて相別れたる由」という、森有礼が伊藤への書簡に記した情報が、数々の本で紹介されているが、ここでも、真辺氏の見方は従来の説を大きく補い、あるいは覆している。つまり、ロンドンでの「談話は多岐にわたった」らしく、スペンサーと板垣との交流は板垣帰国後にもしばらく続いた、と。「no, no, no」と大きく異なる模様である。

板垣がフランスで大きな功績をあげることが出来たかどうかについては、議論の余地があろう。分裂、資金難、解党。欧州各国の憲法学の権威の門をたたいた結果、20世紀半ばまで日本帝国の憲法となった文章を起草してみせた伊藤との差は一目瞭然である。ただ、何で以って功績と見なすかはけっして自明ではない。歴史には意図せぬ結果がつきものである。板垣がフランスで本当に苦闘したとしても、その根拠を、彼の感覚の鈍さに帰するのは少し厳しすぎるではなからうか。

では、ここで、二つ目の問題に移りたい。それは同時に、上述の二つ目の手法、つまりこれらの動きを広角レンズで捉え、それらが意味したものを日本国内の政争に帰するのではなく、1883年のフランスという背景から考えて位置づけてみる試みである。

1883年、フランス、パリ

まず、パリという「空間」について少し触れたい。

板垣が過ごしたパリは、どのような場所であったか。1883年にはパリはすでに芸術の街として確固たる地位を獲得し、モネなど印象派の画家たちの多くがすでに世に名を轟かせていた。ジャポニズムという波はすでに20年前から大きなしぶきをあげてセーヌ川の岸に到着していた。ナポレオン三世の庇護の下でオスマンによる大改造が行われ、市街全体に幅の広いブールバールがのびてゆくようになる。ロンドンと違って地下鉄はまだ走っていないし、エッフェル塔の着工もまだであるが、今も世界中の観光客を魅了してやまない「花の都」パリの建物とモニュメントの多くはすでに姿を現していた。

パリは、しかし、何と言ってもフランスの政治の中心地で、多くの建築物は波乱に満ちた19世紀のフランスの政治史を反映する記念碑でもあった。たとえば、板垣の宿が隣接するシャンゼリゼ通りは、単なる幅の広い道ではなかった。1805年のアウステルリッツでの勝利を記念するためナポレオン・ボナパルテが建設を命じた凱旋門のある広場から1キロ以上東へと伸びるが、1871年にセダンでナポレオン三世のフランスに決定打をあたえて戦勝したプロシア軍が凱旋を行い、パリ市民に敗北の苦杯を最後の一滴まで飲ませたステージでもある。同じ凱旋門は、板垣訪問の2年後に死去したユゴーの葬式のため黒い布に覆われ、再度パリ市民の悲しみが噴出する舞台となった。あるいは、板垣がホテルから北の方を眺めたなら、パリの街を見下ろすモンマルトル丘の上で大きな建設現場が見えただろう——サクレクール寺院の基礎工事である。ただし、1882年に、板垣が親しく交流したクレマンソーも加わった反対運動が盛り上がり、あと一步で建設が中断されそうになった。パリ・コミューンに加担した人々が大量処刑された場所に建てられる教会を、カトリック教徒たちの保守派が対普敗戦とコミューンに対する「贖罪」と位置付けたところが許せなかったそうである。クレマンソーらは教会建設を「1792年の革命を否定する試み」として攻撃した。¹⁷⁾

「花の都」に戦争の傷がまだ多く残っていた。プロシア軍による包囲と襲撃だけでなく、1871年のパリ・コミューンの蹶起とその弾圧にともなう激しい

戦闘も市街に大きな被害をもたらした。多くの建物、とくに宮殿や貴族屋敷の類は1870年代を通して戦乱の爪痕を生々しく留めていた。何をどのように片づけるか、再建するか新築にするかなど、その一つ一つが王党派と共和派の対立の種となっていた。1871年に破壊されたチュイルリー宮殿も、瓦礫を撤去して元通りに再建するというオスマンらの提案が却下されたのは、まさに、板垣がパリにいた年である。オスマンによる改造は、単なる景観上・衛生上の美化を追求したのではなく、(1848年革命のように)狭い路地が庶民の暴動の温床となる中世の街並みを一掃して、治安の維持をしやすいものも主眼の一つであった。

何はともあれ、1878年に開かれた万博に向けて復興は急がれ、外国人もパリに戻るようになった。板垣が泊まった「メヤベヤア」という「客舎」の正体は定かでないが、万博にあわせて近くに Continental などのような豪華なホテルが何軒も建てられていた。1883年2月に、ユゴーの著作集の出版祝賀会が大大的に行われたのも、同じコンティネンタルであった。¹⁸⁾

1871年の敗戦から7、8年ほどの間、保守的な政策が打ち出された。プロイ公率いる王党派によって、言論が制限され、1873年に革命記念日を祝うこともマルセイエーズの斉唱も禁止された。1874年に、全国の市長は大統領によって任命されるという法律が成立する。なんとしてでも共和思想の復活を妨害しようとする政策であった。ただし、敬虔なカトリック教徒がおおく保守派の支持が盤石な地方と違って、パリは共和派が強かった。内閣は危険で物騒なパリ市内を避け郊外のベルサイユから政治を行い、市内に戻ったのは、共和派が政権を奪還した後の1879年である。1880年に革命記念日が復活したのも偶然ではない。1883年にシャトードロー広場が「共和国広場」へと改名され、その象徴であるマリアヌ像が建てられた。板垣がパリに到着した直後に死去したガンベットの像もあちらこちらに現れはじめた。もっとも象徴的な変化は、1885年に起きる。国民的作家であるユゴーの葬式を機に、かつて王室御用の教会だった建物が共和国のために尽力した偉人を埋葬する殿堂（パンテオン）へと改められた。

板垣がホテルの窓から眺めたパリは、戦乱から立ち直ろうとする芸術の都で

あり、保守的であっても王政復古より平和を望む地方の有権者たちも「共和国」というアイデンティティを受け入れ落ち着きを取り戻しつつあった、フランスの首都であった。

さて、パリの建物から、政治と社会に焦点を移そう。

『第三共和国下の文化と政治』で、E. ポノムは、「1848年以降、フランスに二つの、対立する共和国があった」とする。一方は（小）市民たちが考える共和国で、他方はインテリと労働者たちを束ねようとする社会主義的共和思想を標榜する勢力の考える共和国である」と分析する。¹⁹⁾ 興味深いことに、後者よりも前者が普遍選挙権への思い入れが強かった。それは、上でもふれた地方の有権者たちの保守的な傾向にそれほどの危機感を感じていなかったからである。後者のラディカルな共和派は、コミューンだけでなくフランス革命後の恐怖政治の記憶が足かせとなり1870年代前半に広い支持を得るのに苦闘した。しかし、これらの疑念も徐々に払拭され、共和派は一大勢力として躍進する。1879年に参議院選挙が行われ、174議席の獲得で126議席の王党派を抑え、ここからは共和派による改革が本格化していく。

とくに画期的だったのは、カトリック教会という保守思想の砦がきわめて大きな影響力を持つ教育の改革であった。1850年代から義務教育の徹底した導入など近代化を要請する声が上がっていたが、「第三共和国体制が完全な勝利を占めるようになる時期までは、いずれの文相も […] 本気で取り組もうとはしなかったのである。中等教育の改革はとりもなおさず政治改革であり、共和国体制が確立した1879年に至ってはじめて陽の目を見るようになったのである」というわけである。²⁰⁾ この時からフェリー文相が辣腕を振るう。自由と平等と博愛という共和思想の根幹が朝の最初の授業で教えられるようになり、同時に、教育の「世俗化」が推し進められた。1882年に公立学校のカリキュラムから神学が削除され、1886年には神父などを公立学校の教員から外す法律が採択された。女子高等学校の建設も1880年の法令で大きく前進した。フェリー文相が確立した学校教育の無料・義務・世俗性は、1960年代までフランス学校教育の基礎となったとする研究もある。²¹⁾

フランスの共和派がすぐに着手した、もう一つの大きな改革は、言論の自由化であった。1881年に、かつてプロイ公爵が設けた言論統制が解かれ、冒瀆罪などが廃止されるとともに、それまで有罪となった人たちも恩赦を受け釈放された。指導者のガンベッタが1871年に立ち上げた「ラ・レブリック・フランセーズ」(フランス共和国)紙が保守的な地方にまで共和派の政治理念を広めたという功績を忘れてはいなかったのだろう。1876年に創設され1部5サンチームの廉価だった「ラ・プチット・レブリック・フランセーズ」は、雑報や小説の連載などを使ってさらに多くの読者を獲得した。²²⁾ ジャーナリズムは、共和派にとって生命線の一つであった。新聞の郵便配達料が下げられ、新聞雑誌の発行部数が大きくのびた。パリの新聞だけでも、部数が一日に2百万部まで増え、風刺画に特化した雑誌なども多く出版されるようになった。政治面でも、1880年代はフランスにとって、新しい体制の定着と共和思想の浸透の時代であった。板垣がヨーロッパの政治社会が進歩していないことに失望したと言われるが、それはこの定着と浸透への失望ではなかったはずである。また後に触れたい。

ガンベッタ

板垣こそフランス語が読めなかったが、同行の栗原と今村は宿を出てすぐに新聞を手に入れたとしても不思議はない。ただし、共和派寄りの新聞には、今村のそれと大きく異なる政治思想が展開されたはずである。わざわざ板垣に読み聞かせるようなことはなかったと考えられる。栗原の報告には、パリ到着直後、ガンベッタの訃報に触れて葬式を見に行ったとあるが、当時の新聞のなかでガンベッタの生涯を振り返ったりその功績を称えたりする記事を載せるものが多かったと推測できる。半年ほど前から政治の第一線から退いてパリ近郊の邸宅で暮らしていたガンベッタは、板垣にとって最も会いたい人物の一人で、刺激になる様々な交流への期待が大きかったに違いない。

レオン・ガンベッタ (1838-1882) は、板垣より1年若く、普仏戦争前夜から共和派を率いる指導者として活躍していた。単純な比較はむずかしいが、その生涯を俯瞰すると、板垣にして並みならぬ共感を抱かせるに足るものがあ

る。フランスを代表するラールス事典はその生涯を時代順に整理する——共和派弁士、愛国者、野党の指導者、政府の要人。²³⁾ 1857年に故郷の南仏を離れ、法学を修めにパリに赴き、共和派の弁護士として頭角を現す。1869年に、マルセイユの選挙区で保守派の候補レセップス（スエズ運河を建設した本人）をやぶり当選を果たす。普仏戦争の脅威が迫る中で戦費予算の採決に反対票を投ずるが、その後態度を一変して賛成派に加わる。セダンでのフランス軍敗北とナポレオン三世の捕獲の報を受けて国の統一を優先したいとして共和国宣言をためらうが、数日後、自らパリ市庁舎で第三共和国の宣言を行い、プロシア軍に対する統一戦線を実現する。1870年10月7日に、プロシア軍に包囲されたパリのモンマルトル丘から気球で脱出し、和平交渉に応じようとする（旧）政府の意に反して徹底抗戦を呼びかけてフランス各地をめぐる。

ちなみに、同時期の板垣はというと、東北での戦闘からすでに2年が経った1869年秋から高知藩大参事と軍務局大幹事を併任して、国民皆兵の理念のもとで「人民平均の理」を布告したり、東京でフランス軍をモデルにした御親兵の創設に携わったりするような活躍をしていた。実は、1870年8月14日に欧州への派遣命令が出ていたが、辞退したらしい。²⁴⁾

一方、徹底抗戦を図ったガンベッタは、1871年1月28日にパリが降参すると、プロシア＝ドイツ帝国の領地となったアルザス選挙区から立候補して当選するが、いったん国外に亡命する。しばらくしてパリの政界に戻り、権力を握る保守派と妥協を探りつつ共和派の挽回を図る。1879年にジュール・グレヴィが共和派の大統領として就任する。政友のガンベッタは一時議院議長をもつとめながら共和派の統一のために奔走するが、決して順風満帆ではなかった。例えば、1880年、パリ・コミューンに参加した科で処罰を受けた人たちへの全面的な恩赦についても、ガンベッタが慎重な姿勢をしめす。そして、しびれを切らした同じ共和派のクレマンソーらと衝突した。ガンベッタは1882年夏に議事堂での争いとパリの喧騒に疲れてパリ郊外にある邸宅で暮らすようになるが、12月の末に非業の最期を遂げて他界する。板垣らが見に行った葬式は、4年後のユゴーのそれに比べれば規模が小さかった（3分の1ほどと言われる）が、パリで大勢が参列しただけでなく、特別列車を走らせて全国各地で追

悼の式典が行われ、お墓は南仏のニースに設けられた。²⁵⁾

戊辰戦争／普仏戦争、自由を掲げ保守の政権の言論弾圧に対する抵抗、攻撃と協力をを繰り返す政府との関り、メディアの駆使、機会主義と呼ばれるところ、これらの点を「共通点」と見なすのには、1870年代の日本とフランスとの違いはあまりにも大きい。ただし、皮相な類似として一蹴してしまうのも一種の知的怠惰ではないか。一国単位だけで歴史を見ようとするレンズは、細部にわたる観察を可能にしつつも、奥行きを犠牲にすることがしばしばある。日本でもフランスでも、理想を見失うことなく状況判断をすることは、既存の体制の保持に徹する政治家に求められない綱渡りであった。

敗戦前の帝政下での活動、また敗戦後の保守政権との対決——共和派のたどった一途は起伏と曲がり角の多いものであった。とくに、「*Ordre Moral*」(道徳的秩序)と謳った、クリミア戦争やアルジェリアで軍功のある旧軍人ドマクマオン大統領の任期中、共和派の指導者たちはぎりぎりの状況判断を求められた。初期の第三共和国の政治および社会情勢に照明を当てる著作に、執筆者が「機会主義者たちの共和国」(“*la république des opportunistes*”)というタイトルをつけたのは、単なる気まぐれではない。一つの例には、上でも少し触れたコミューン参加者への特赦という議論が挙げられる。特赦を求めるラディカルな共和派もいるが、ガンベッタは何年もの間にはっきりとした姿勢を示さなかった。ユゴーが1872年に早くも特赦を提案したのに対して、ガンベッタが全面的な特赦への賛成に回ったのは、1880年である。「機会主義者」の慎重な姿勢は、まさしく、コミューンの行き過ぎたラディカリズムを教訓にしていた。²⁶⁾ 保守派との妥協もしかり。1872年にティエール大統領が、議会で過半数を占める自分の保守派内の反対の声を抑えて、新しい憲法作成のための委員会を立ち上げると、ガンベッタらはティエールに接近して請願運動などで保守派への圧力を強める。コミューン弾圧の立役者ティエールへの接近は、しかし、あくまでも作戦である。「[ティエールを] 繋ぎとめ、妥協に晒し、巧みに利用しようとする。味方を遠ざけることなく、何も放置することなく、騙されたり目隠しをされたりすることなく。この待機と警戒は共和派にとって辛抱の学校となる」。ガンベッタは、共和派の副大統領を置くことを条件にティエールの再選

協力をも検討していたらしい。²⁷⁾

ガンベッタの経済政策も状況判断が目立つ。新興国ドイツの急な経済力の拡大に比して成長が鈍いフランス。小規模の商店や土地所有者層の財産を保護することを唱えて地方を遊説する一方、帝政時代に展開され数々の協定でフランスを国際競争にさらす自由貿易を擁護して、鉄道建設など公共事業の拡大をも呼び掛ける。「自由主義」あるいは「保護主義」のような範疇に収まりきれない揺れ幅であり、まさに「opportunisme」の表れとされる。²⁸⁾

ガンベッタの「機会主義」と板垣のそれについて同枠内で考察することは、板垣のパリ滞在が生み出したものを、面会した人々の列記だけに帰するのではなく、それを「可能性」の次元でとらえる作業である。それは一定の危うさを伴うが、視野の拡大にもつながる。洋行が行われようとした、あるいは実際に行われた時点で、その歴史的な意義がすでに決まっていたわけではない。「洋行」という物語の中で迷子になってしまった哀れな主人公板垣退助——このようなストーリー設定を離れることで、ほかの見方も可能になってくる。伊藤らは、板垣が欧州での見聞によって自由思想の限界に気づき、(伊藤らが見抜いていると自負していた)「現実」を受け入れることになるだろうと期待していた。²⁹⁾しかし、ガンベッタとの会合が実現したなら、どのような交流が出来たかは、あらかじめ決まっていたわけではない。まして、一行のパリ到着後にガンベッタが急死したことも。ちなみに、ガンベッタは郊外の自宅で自らの拳銃の誤発で怪我を負いその後遺症が命取りとなった。³⁰⁾

アコラス

さて、ここでもう一人の人物について紹介しよう。上述の真辺の論文も、板垣のエミール・アコラス (Emile Acollas, 1826-1891; 表記は「アコラス」とも) との面会と知的交流に注目している。フランス中部の生まれであるアコラスが歴史記録に残した最初の大きな功績は、1867年にスイスのジュネーブで開かれる「自由平和連盟」である。彼は、生涯を通してラディカルな自由主義と欧州連邦建設構想もふくめた平和主義を貫いた。執筆活動も旺盛で、当時フランスだけでなく欧州各地で導入されていたナポレオン法典の改定を提唱する

著作が注目されていた。時期的にも思想的にも滞仏中の中江兆民と交流があったてよさそうな人物であるが、それを裏付ける資料はない。³¹⁾ただし、西園寺公望だけでなく、板垣に付き添った今村和郎がアコラスの法学塾で学んだのは確かである。どちらかが板垣を彼に紹介したと思われる。アコラスは法学者で文筆家であったが、(マルクスのそれとは異なる)社会主義的政治活動にも携わっていた。反政府活動の容疑で投獄されたり、出獄してすぐに『労働者』という新聞発行に乗り出したりして、人民の完全な自治や革命権などを掲げつづけた。スイスのベルンで教鞭を執っている間に普仏戦争が勃発して、平和主義の夢は時代の波に呑み込まれてしまう。一方、彼の思想に呼応するかのように蜂起したパリ・コミューンから大学の法学部長の招きを受けて、一躍〈時代の人〉となる。しかし、それもつかの間のことである。スイスにいるから応じることが出来ず、帰国後、選挙に敗れて政治家という道は絶たれる。法学塾を再開して日本人留学生を含めて多くの人に影響を及ぼし続け、生前、その著作の数々が和訳される。³²⁾

真辺が紹介する板垣とアコラスの会談は、実りのあるやりとりであった。日本の来客と接するのに慣れていたためか、板垣に欧州に来て抱いた感覚を尋ねるが、板垣の返事——哲学、産業、交通など「生活社会」が目覚ましく発展しているが、国政による干渉、地方自治への制限が多いこと、政党はまだ私党であるなど「政治社会」はあまり進歩していない——に感銘を受けたという。このコメントは板垣が欧州の政治社会の未発展に失望した証言として取り上げられることが多いが、真辺は、それを帰国後の政治活動に生かした洞察、つまり、西欧諸国の発展は自治と団結の精神に支えられその精神に学ぶべきであるスタンスとして、自由党の解党もこの視点から読み解く。解党の決断は、政府側が誤って解釈したように、諦めのような心境からではなく、活動の継続を前提とした呼び掛けであった、と。郷里の高知をはじめ、日本各地で精力的な演説活動を行い、「従来言われているように決して政党活動に消極的になったのではなく、むしろ逆に西洋見聞によって、政治・社会の改良のための団結の必要性を説いて、政治活動に熱意を燃やし続けた」。³³⁾そして、板垣のその活動において、人民の参与のない専政があまりにも長い間敷かれた日本の社会を活

発化するには、政治の改革を行っただけで社会の改良に取り掛かる必要があるという、欧州で再確認できた政治論が展開された。

アコラスを中江兆民研究の関連でくわしく紹介するのが米原であるが、板垣との会談にはほとんど触れていない。それはそれでよい。実際に面会したかどうかは定かでなくても、兆民は1884年にアコラスの著書の和訳に携わり、思想上でも十分に相通じるものがある。³⁴⁾

ところが、日本でアコラスのそれに最も近い思想の持ち主は、おそらく、中江兆民ではなく、植木枝盛（1855-1892）である。後藤は「アコラス、兆民、小島、平民社の論理的潮流と、自由平権思想にまで理解を示した枝盛とは少なからぬ論理的交叉の可能性を秘めている」と書く。³⁵⁾ さらに一步踏み込む研究もある。重松が指摘するように、植木はフランスの渡航歴もなくフランス語が読めないのがフランス学の専門家としては評価されていなかったが、アコラスの『仏国法典改正論』を熟読しただけでなく、きわめて進歩的な民法論を発表していた。すなわち、「アコラスの法思想をもっともよく継受した日本人は、植木枝盛だったといえるだろう」、と。³⁶⁾

歴史の皮肉。藩に才能を見出された若き植木は東京に派遣されフランス語を学びはじめるが、その学習が軍事的知識を得るためであると知らされると、退学して歩いて故郷の高知に戻った、という逸話が残っている。³⁷⁾ 植木は、1891年10月に自死を選んだアコラスの後を追うかのように、1892年2月に胃病のため他界する。

最後に、一瞬であれ板垣と意気投合したアコラスをプリズムに、もう一つの視点を加えたい。社会主義（マルクシズムではなく！）に傾倒するアコラスは、あらゆる君主制に懐疑的であった。上でも触れた「自由平和連盟」は、普仏間の緊張の高まるなか、ジュネーブで平和と民主主義を議論する会議を開催したが、欧州全体から1万人の支援者を得たらしい。そのなかには、V. ユゴーとJ. S. ミル、またイタリア建国の父ガリバルディなどがいた。真の平和を達成するには、個人の自由を保護する共和国による連邦の構築、教育を通じての偏見の払拭、そして持続的な民主化活動が欠かせないとされ、「平和」は「革命」と隣り合わせの理想として理解された。板垣は、しかし、アコラスが掲げ

る君主制を排した共和制を到底受け入れることが出来なかった。帰国後、アコラスの理想を受け継いだ社会主義との距離が決定的となり、平和主義に関しても、『板垣政法論』で展開された構想はアジアでの「現実」に形骸化される一方であった。

海外政策、植民地、アジア

日本の自由主義とフランスの共和主義、またその指導者たちの接点の有無、その比較の可否については、議論の余地はあろう。とくに、日本の自由主義者のほとんどが共和制を擁護するどころか、その検討すら敬遠する点では、大きな差異があると言わざるを得ない。一方、「自由」と「平等」のもとで邁進しながら、他国の自由と平等を踏みにじる国策を難じることなく、むしろそれを後押しする点では、両国の自由主義者らは等しく矛盾を抱えていた。つまり、両国の場合、自国を外敵から守るという懸念事項は、いつの間にか植民地の獲得や「勢力圏」の拡大という関心事へと様変わりしていく。

1873年の征韓論はさておいても、日本国が1880年代からとり始めた対朝鮮外交と軍事上の政策を、自由主義者らは不当な干渉と力による服従として非難するどころか、開国や文明化の名の下でその徹底を望んでいた。フランスはどうか。ナポレオン三世は海外戦争を利用して自分の人気を高めようとしつつも、メキシコへの派兵など失敗に終わる作戦が多かったが、1880年前後からフランスは新たな海外政策を展開し、20年くらいで、フランスの支配する帝国がイギリスのそれにつぐ規模にまで膨張した。そして、その土台作りには、あの共和主義者のフェリーが深く携わっていた。

1883年の板垣退助は、日本の政治社会を進歩させる材料を探しにフランス革命の本場パリを訪れ半年近く観察をつづけたが、同時に、彼は植民地帝国の都であるパリにたどり着いた一人のアジア人として、フランスの植民地政策という現実を直視せざるを得ない立場に置かれていた。ちなみに、帰国後の演説で、板垣は西欧列強が自国で政治の基準とする自由や権利などがアジアの植民地でことごとく無視され、欧州に向かう船が寄港するたびに自分の目でアジア人に対する奴隷のような扱いを目の当たりにしたとして、その惨状を訴え憤慨

する。

板垣の体験と観察はけっしてユニークなものではない。日本から欧州に渡るのには、20世紀半ばまで、板垣が通ったのと同じルートを経て、同じ手段を使うのが主流であった。1916年からシベリア鉄道が開通して陸路という選択肢もあったが、海路を好む傾向があった。欧州への旅は「まさに修学旅行として機能」することが多く、それぞれの港は、内陸を探索しなくても、それぞれの地域の状況の代表（中国→香港、インド→コロombo、アラブ→アデン）となり、風土や文化や植民地という支配体制の標本と理解された。³⁸⁾そして、多くの旅行者が最初に欧州の土を踏むのは、板垣同様、マルセイユであった。多くの日本人は1885年設立の日本郵船で渡ったそうであるが、栗原の記録によれば、板垣は行きも帰りもフランスの船で渡った。それは、白人とアジア人との差、あるいは差別を一段と強く意識させられる環境であったとも考えられる。

板垣の洋行は、「洋」＝137日のパリ滞在期間が、81日の「行」＝船上生活に挟まれる体験であった。栗原の「日記」を参考にしつつ、そしてフランスとの繋がりを念頭において、もう少し詳しく見て行こう。

香港、シンガポール、コロombo、アデンなど、寄港地の多くはイギリス領であった。世界の海を支配する大英帝国にとってアジアと欧州を結ぶ航路は最重要視され、寄港地の確保は意図的な作戦の結果であった。ところが、2500キロも離れている香港とシンガポールの間に位置するインドシナ半島の中継点は、コーチシナの主要な港町サイゴンであり、フランス領となっていた。板垣が乗った船も、サイゴンで錨を降ろす。栗原がつづる一行のサイゴン体験は、つぎのように要約できる。

○ 24日 ヒマラヤの雪解け水を豊富に湛え色鮮やかで美しい景色の中を流れるメコン川の河口から40里ほど遡ってサイゴン港に入る。兩岸に沃野が広がり「土人岸ニ沿フテ處々小屋ヲ結び耕耘ヲ勤ム […] 萬頃一碧ノ觀ヲ呈セリ此地豊穰産物多ク特ニ米ニ富ム」が、古くから明国清国と入貢の関係にあった安南（そして、カンボジアとビルマ）は近時「西人ノ遠征ニ遭ヒ英仏ノ民屢々戦ヲ挑ンデ其地ヲ略シ半ハ其覇属ト為ルニ至レリ」。西洋人との交流を拒んで

英国からの攻撃を受けるが、「復た遂ニ仏人ノ征服スル所ト為レリ」。着港後すぐに「登陸」して街を巡覧する。新開のため香港に比べれば粗野にみえる。「賤業ヲ執ル者ハ首ニ土人ナリ男女俱ニ衣服ハ簡易ニシテ多クハ半身ヲ裸シ歩ハ跣足ヲ常ト」するが、商店を営む「支那人」も多い。ただ、「巨商富豪ト称スルニ足ル者ナク、壟断ノ利ハ総テ白人ニ帰スル」

○ 25日 午前抜錨して流を下る。シンガポールに向かう。

フランス領サイゴンに対してとくに幻想を抱いていないようである。上でも触れたように、1883年は清仏戦争に至るフランスの武力行使がすでに進行中であった。ここでは、イギリスともドイツとも異なり「自由」の旗を掲げて再三君主制と決別してきたフランスが、植民地をどのように獲得したかよりも、それをどのように正当化し続けたかが肝心である。ナポレオン三世が自分の権威を高め大衆の心を掴むために企てた数々の軍事的冒険——琉球にまで軍艦を出している³⁹⁾——は、当地のキリスト教徒の保護および布教の自由を大義名分としていた。同じ名目で行われたベトナムへの侵攻は1840年代から始まり、1867年のフランス領コーチシナ成立に至る。けれども、帝政消滅後、共和派が徐々に勢力をのぼす第三共和国において、宗教の保護を口実に植民地政策を続けることは難しくなった。1880年の都市部で、教会に行く敬虔なキリスト教徒の男性は、わずか5%であった。⁴⁰⁾ それでも、インドシナへの侵攻は続けられた。ガンベッタをはじめ、フランスの多くの政治家や外交官たちは対独関係と欧州内の地位の安定を優先していたが、共和派が議会での議席を徐々に増やし政権の奪還に成功する1870年代後半から、発展を遂げるフランス産業のための活路（原材料の供給、製品の市場獲得）をアフリカとアジアに求めようとする声が、共和派の中でも強くなっていく。それでも、「植民地主義者」といわれる勢力自体はけっして強くなり、展開される政策は、少なくとも1885年まで、成り行き任せの観すら呈している。P. プロシュューは、インドシナでの進出を「曖昧な植民地化」⁴¹⁾と形容しているし、C.M. アンドリュューも計画性のなかったこと、植民地拡大をよびかける議員たちの「植民地派」(“colonistes”)が常に少数であり、多種多様の利害を代弁していたことを強調している。⁴²⁾ 問

題は、その政策を国内外でどのように正当化したか、である。一方では、「国威」。つまり、大国としての地位を挽回しようとするためにフランスは加速化する植民地争奪戦に積極的に参加しなければ取り残されてしまうと論じる「colonistes」が押しやまなかった「国の名誉」というツボ——「英国は植民地について熟慮の上で行動する余裕があったが、フランスにはなかった。どの植民地領土を失っても、それはすでにけがされたフランスの名声にさらなる汚点となる」。⁴³⁾ ガンベッタよりも左寄りの共和派とされたジュール・フェリーは、やがて、植民地拡大の主唱者になる。フェリーは、J. クックが「新しい帝国主義」(“new French imperialism”)と称した積極的な拡大政策に乗り出す。1880年はコンゴ、1881年はチュニジア、1883年はマダガスカル島北部……という具合である。フェリーいわく、「自分の領土だけに閉じ籠るのは偉大な国には無理である」、と。⁴⁴⁾ そして、植民地拡大推進派のフェリーの演説や著書に登場するのは、もう一つの正当化である、つまり、優れた人種であるフランス人が未開の地に自由と平等とフランスの文化をもたらす、という言葉である。その中で、一貫して植民地政策に異論を唱えたのがアコラス門下のクレマンソーであった。⁴⁵⁾ 誤解がないように付け加えるが、ベトナムの征服はけっして無抵抗の裡に遂げられたのではない。それは度重なる増援隊の派遣が必要となった血腥い戦いを要した。⁴⁶⁾ ただし、結果は変わらなかった。計画はなかったが、1883年2月に第二次フェリー内閣が成立するやいなや、現地でリビエール司令官が無謀な軍事行動でつくり上げる既成事実を引きずられ、議会での異論を押し切って積極的な政策を遂行する。ハノイが占領されるのは3月。板垣らが日本に帰る船で再びベトナムに寄港するのは6月の中旬。安南がフランスの支配下に置かれたのは8月である。その2年後の天津条約でトンキン（ベトナム北部）もフランスの「保護領」となる。

板垣が訪れたフランスとその指導者フェリーは、フランスの政治理念を旗印に、アフリカやアジア各地で同じ理念を踏みにじる植民地支配を成立させた。板垣らはこの矛盾とどのように向き合ったか。栗原の「日記」は、西洋人によって奴隷扱いされ、抵抗するのを諦めた「卑屈」な「土人」に少なからぬ苛立ちを露わにしている。板垣はこの苛立ちを共有していたに違いない。同じア

ジア人として許しがたいと感じたのだろうか。もしかすると、かつての戊辰戦争で苦境に立たされる会津藩の農民の政治的無関心を目の当たりにして覚えた憤慨と、自ら行動を起こし植民地というくびきを振り払おうとしないアジアの「土人」への蔑視とは、相通じるものがあり、紙一重であったかもしれない。

西欧列強が翳す「文明」とアジアでの野蛮な行為との矛盾を鋭く突いても、日本の外交政策に話題が及ぶと、同じように大きな矛盾した姿勢をとるのが、自由党の抱える『自由新聞』であった。つまり、日本で自由と（英仏などを参考に）生活社会の充実を唱えながら、アジアにおいては、同じ理想と大きく異なる行動、すなわち「列強に伍する」ための政策を難じない。最初からそうであったわけではないが、本来国内の民主化を優先すべきだと主張する「小国主義」をとなえた論者たちも、ある事件を契機に「読者をしてパワーポリティクス論に道を開きはしなかったであろうか。それとも、小国の運命の慨嘆は、別の原理に道を開くのであろうか。」と松岡が説いている。その事件とは、まさに、板垣が帰国してほどなく勃発した安南事件である。清国の隣国であり清朝によって「属国」と見なされる点では、安南はわずか一年前に壬午事変が起きた朝鮮と共通している。そして、両事件を比較すると、清国と対抗しているのは、日本とフランスである。6月19日から24日の間に『自由新聞』に、清国が勝利した方が日本への影響が深刻だとして「仏国ト連合セン乎」を提言する論説が載った。あくまで一論客の意見として片づけられない。そして、26日の、フランスの国内の諸対立にもかかわらず、対外問題には挙国一致して対応する政体を称賛する記述には、また異なる意味で、日本の先行きを予感させるものがある。⁴⁷⁾

むすび

板垣洋行は何をもたらし、自由民権運動と世界とのつながりについて何を教えてくれるか。以上の考察は、実際に起きたこと、記録されたこと、語られたことの検証によって明らかになる部分と、時代背景と洋行後の政治や社会の行方を念頭に置きつつ洋行を〈可能性〉の次元でとらえる部分と、その二つを織り交ぜながら、より広い視野を提供しようとした。

1957年に板垣の洋行が何をもたらしたかについて分析するC. コーディの見解は、1992年の松岡のそれとほぼ重なる。それはラディカリズムから距離をとって、漸進的な社会改良に軸足を置くという政治姿勢の変化を意味した。同時に、かつての自由主義がますます「愛国主義的」(“nationalist”)に変わっていく転換点である、という見方である。⁴⁸⁾

1890年代から第二次世界大戦まで、10年ごとに近いペースで、アジアで軍事行動を展開し、解放を旗印に西欧列強のそれに匹敵する帝国を築いた日本は、それらの地域にどのように「歓迎」されたかは、周知のとおりである。ただし、1883年の板垣に、理想に溺れ「no, no, no」と呆れられた男というレッテルを張ることがあまりにも安易であるのと同じように、その70年後の結末を見据える慧眼がなかったという罪状を叩きつけるのもいくらか酷である。

それにしても、『板垣政法論』がフランス語に訳されアコラスの目に触れたのなら、どのような化学反応が起きたか想像したくなる。その反応を起こすのに、しかし、板垣と後藤ではなく、まさに植木枝盛という触媒を投入しないといけない。パリのホテル、パリの学塾。その場にはいない者の存在感が、その場にいるもののそれを上回ることがある。

栗原の「日記」の最後に、到着して間もない時にガンベッタの死を報ずる新聞に触れて「仏国ハ宛モ余等一行ノ来着スルヲ待チテ活劇場ヲ開カントスルガ如ク」という言葉がある。まるで一行の到着を待っていたかのように、急逝と国民的葬式という見世物が用意されていたという感動を漏らす。読むものを惹きつける筆致であるが、栗原はみずから大きな役を演じる洋行という一幕について、沈黙しつづけた。

板垣洋行それ自体は、不器用な板垣が西欧の先生たちを困らせる喜劇でも、日本の自由主義を大きく前進させる武勇伝でもない。わたしには、「帝国主義」という時代の風に逆らって渡った海を、今度は同じ風を受けようと戻ってきた航海を描く無声映画のワンシーンのようにも見えるが、どうだろうか。

注

- 1) たとえば、『民権自由論』（植木枝盛集第1巻、1-36頁）。
- 2) 新聞の紙面で繰り広げられた論戦は、田中由貴乃「板垣洋行問題と新聞論争」『佛教大学大学院紀要文学研究科篇』第40号（2012年3月）、1-17頁、が詳しい。
- 3) とくに洋行に同伴した後藤象二郎の役割は、「疑わしい」。福井淳「板垣退助遭難事件に対する諸政治勢力の対応——自由党と明治天皇・政府とを軸として」『書陵部紀要』（宮内庁書陵部）、第49号（1995年）、52-70頁。56頁：

「これに加えて、官民調和派の板垣洋行計画が活発化しつつあったのが、まさにこの時期からであったことも原因として考えられる。後藤象二郎は事件直前の四月二日、井上馨と福岡孝弟邸で密かに会談した […] すなわち、後藤は洋行実現のために事件の鎮静化を望み、本部を突き上げる地方党員を二度までも鎮撫しようとしたのであろう […] 後藤の動きは洋行計画実現のために高揚しようとする自由党の活気を内から削いでいくという形をとったので、その影響は大きかったと考えられる」
- 4) たとえば、山下重一「明治初期におけるスポンサーの受容」『年報政治学』26号（1975年）、77-112頁。
- 5) 榛葉英治『板垣退助——自由民権の夢と敗北』（新潮社、1988年）、110頁。Marius Jansen, *The Making of Modern Japan*, page 388.
- 6) 村瀬信一「板垣・後藤洋行問題再考」『日本歴史』2020年10月号、吉川弘文館、45-61頁。
- 7) 瀧井一博『文明史の中の明治憲法』（講談社選書メチエ286、2003年）、99頁。
- 8) 近年、公文豪編『板垣退助伝記資料集』（高知市自由民権記念館、2020年）が刊行されているが、タイトル通り、板垣自筆の書籍を集めたものではない。
- 9) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/760931> (doi: 10.11501/760931), 1-58頁。
- 10) 真辺美佐「民権派とヨーロッパの邂逅——自由党総理板垣退助の洋行体験と政党認識」、小風秀雅・季武嘉也編『グローバル化の中の近代日本——基軸と展開』所収（有志舎、2015年）、23頁。
- 11) この「ロハン通り」に関しては、つぎのリンクにある1844年の資料が詳説している。いわく、「水道完備。ガス灯あり」、と。(2021年11月8日最終閲覧) <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k200946t/f601.item>
- 12) 稲田雅洋『自由民権の文化史』（筑摩書房、2000年）、213頁。栗原は、1876年に自身が社長である『草莽雑誌』の発行禁止に不服を申し立て、内務卿を相手に裁判を起こすというエピソードもある、容易に動じない活動家であった。
- 13) 松永昌三『中江兆民評伝（上）』（岩波現代文庫、2015年）、34頁。

- 14) https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/Detail_M0000000000001704677参照。『東京横浜毎日』の記事は、『国際人辞典』（宮地正人監修、1991年、毎日コミュニケーションズ）〈今村和郎〉、55–6頁参照。また、川崎勝「〈馬場辰猪日記〉から見た板垣退助洋行問題」、『近代日本研究』33（2016年）、163–200頁。
- 15) 真辺（前掲）、12–42頁。
- 16) 同上、25頁。
- 17) Yves Combeau, Yvan, *Histoire de Paris* (Presses Univ. de France, 2013), 72–73頁。
- 18) Lesur, Jean-Marc. *Les hôtels de Paris: De l'auberge au palace, XIXe-XXe siècles* (Alphil ed., 2005), 52–54頁。
- 19) Eric Bonhomme, *Culture et politique sous la IIIème République* (Presses Univ. de Bordeaux, 2017), pp. 362. ここは、21–31頁。
- 20) 宮脇陽三「フランス第二帝国後半期から第三共和国初期までの中等教育制度の近代化過程」『佛教大学研究紀要』第75号（1990年）、96頁。
- 21) Bonhomme, 34頁、また Chapitre II “Les écoles de la République” (133–150頁)。
- 22) ガンベッタが主筆となった新聞と雑誌とそれらが果たした役割については Jérôme Grévy, *La République des opportunistes* (Perrin Terre d'histoire, 1998) 9: Les journaux de Gambetta (pp. 150–170) が特に詳しい。
- 23) <https://www.larousse.fr/→Gambetta> (2021年11月8日最終閲覧) [encyclopedie/personnage/Léon_Gambetta/120756#10980712](https://www.larousse.fr/encyclopedie/personnage/Léon_Gambetta/120756#10980712)
- 24) 中元崇智『板垣退助』（中公新書、2020年）、38–43頁。
- 25) Bonhomme, 39頁。
- 26) Grévy（前掲）、22–23頁。歴史学者でポワティエ大学教授の Jérôme Grévy は、奇しくも、1879–1886任期の大統領の Jules Grévy と「同姓異名」である。
- 27) 同上、26頁。
- 28) 同上、62–82頁。
- 29) 村瀬（前掲）、54–55頁。「伊藤以下洋行計画に関与した藩閥首脳部や後藤が期待したほど変わらなかったことである。」
- 30) Larousse 参考（前掲）。
- 31) 兆民とアコラスの関係性については、Dufourmount, Eddy. *Rousseau au Japon – Nakae Chōmin et le républicanisme français (1874–1890)*. (Presses Universitaires de Bordeaux, 2018)、151–158頁も詳しい。
- 32) 米原謙「エミール・アコラスのこと」『書齋の窓』第367号（1987年9月）、53–59頁。
- 33) 真辺（前掲）、33頁。

- 34) 米原謙『兆民とその時代』(昭和堂、1989年)の中江兆民のフランス留学に関する部分でも、直接会っていないと論じる。70-71頁。
- 35) 後藤正人「植木枝盛の家族法論とエミール・アコラース」『植木枝盛集』(第8巻、月報5、1990年)、5-8頁。
- 36) 重松優「自由主義者たちと民法典論争」『ソシオサイエンス』第11号(2005年3月)、175-189頁。
- 37) 外崎光広『植木枝盛の生涯』(高知市文化振興事業団、1997年)、37頁。
- 38) 橋本順光／鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌——寄港地を読み解く』(青弓社、2017年)、23-25頁。
- 39) 南塚信吾『「連動」する世界史——19世紀世界の中の日本』(岩波書店、2018年)、28頁。
- 40) E. Bonhomme (前掲)、22頁。
- 41) Pierre Brocheux et Daniel Hémyery. *Indochina: An Ambiguous Colonization, 1858-1954*. (University of California Press, 2011). 原典は仏語: *Indochine, la colonisation ambiguë* (ed. La Découverte, 1995)
- 42) C. M. Andrew, “The French Colonialist Movement during the Third Republic: The Unofficial Mind of Imperialism” in: *Transactions of the Royal Historical Society*, Volume 26, December 1976, 143-166頁。DOI: <https://doi.org/10.2307/3679076>
- 43) James J. Cooke, *New French Imperialism 1880-1910: The Third Republic and Colonial Expansion* (Archon Books, 1973), 12頁。
- 44) William Fortescue, *The Third Republic: Conflicts and Continuities, 1870-1940* (Routledge, 2000), 38頁。
- 45) J. Cooke (前掲)、15頁。
- 46) 同上、42-64頁など。
- 47) 松岡惇一『「自由新聞」を読む——自由党にとっての自由民権運動』(ユニテ、1992年)、90-95頁、134-135頁。
- 48) 松岡、同上、65頁。Cecil E. Cody, “A Japanese Liberal’s Response to Europe,” in: *The Historian*, vol. 21, no. 2 (Feb. 1959), 176-186頁。ここでは、185-186頁。